

マクロスX

七式 07

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火星に移住した人類の話。

目次

日常	1
接触	8
再接触	15
ある昼下がりのひと時	22
過去と未来に想い寄せて	28
快晴の遊園地	34
まだ知らぬ未知の物	42
理由の理由	50
何かを理解するという事	56
デブリ	65
男の遊び	73
乱気流	81

1日

日常

1

「また、試験飛行の許可取ってきたぞ。ウイル」

薄暗い格納庫で機体にもぐり作業する青年に、男がへらへらと笑いながら紙切れを渡す。くしゃつとポケットにそれを突っ込んだウイルと呼ばれた青年は作業を続けながら話す。

「事務方のお堅い姉さんは口説けたか」

「それが全然。お前に頼まれて話す機会は増えたが、あちらは仕事が増えたとうんざり顔さ」

機体の下から滑り出たウイルは袖で顔を拭うが汚れが広がっただけだった。

「協力してやってるんだ、頑張れ」

「へへっ、どっちが協力してやってんだか」

ウイルは話しながらも壁際の装置を動かすと、格納庫の扉がゆっくりと開いていく。赤い雲がもくもくと広がる空から格納庫に光が入る。白く、青いラインの入った戦闘機が薄暗い空間から浮かび上がり、ウイルはささっと準備を始める。

「各機の整備は終わってる。三番機の調整をちよつと弄った、違和感があつたら教えてくれ」

男にそう伝えるとウィルは颯爽と機体へ乗り込む。男は笑いながら手を軽く振り「気を付けてな」と壁にもたれかかる。エンジンに火が入ると男に手を振り返し、機体が滑走路へ乗り出していく。

「こちらウィル・アームストロング。発進許可を」

機体の最終チェックの為、各メーターに気を配りながら通信を送る。

「ハイ、こちらコントロール。何度も言ってるけど、飛行許可空域はA-7からJ-9までだからね。わかってる」

「わかってる、発進許可を」

「大佐からグチグチ言われるのは自分だけだと思ってるでしょう。いいわ、発進を許可します。good flight」

ウィルの乗り込む戦闘機の轟音が綺麗にまとまり大きくなる。音のテンションが最高に高まった時、機体は滑走路を駆け出し赤い空に舞った。

壁にもたれかかりウィルが飛び立つ姿を眺めていた男が、自身の真横に設置された受話器を手取る。

「ウィルが出た。いつものヤツさ、全チャンネル開けて基地に繋げてくれ」

そう伝えて彼は格納庫を後にする。

ウイルスは雲すれすれを飛びながら計器を確認する。安定した数字に満足感を感じながら次のチエックに移る。コックピット両サイドに並ぶ鍵盤を優しく撫でると、確認するように音を一つずつ鳴らしていく。1つ、また1つと響く音が少しずつ繋がりに次第にメロディーが現れだす。

「…For example」

流れるようなメロディーの中でウイルスの歌声が響く。基地内ではその小気味好い歌が広がっていく。

仲間と談笑しながら食事の中の者。

書類の山に悪戦苦闘する者。

日々の訓練からか就眠に勤しむ者。

そのどれもにウイルスの歌は溶け込みシーンに彩を与える。しかし、次第に音の幅が広がり音が楽しみだし、曲調に合わせてか機体もくるくると旋回を始め速度も増して行く。危険なアクロバットさながらの動きを始めた頃、ウイルスに通信が入る。

「ウイルス、やり過ぎよ。戻ってきなさい」

勿論、この警告も基地に響く。ウイルスは聞こえたか聞こえなかったのか、悪びれもせずそのまま歌い続ける。

三十分ほどそのまま歌い続けたウイルに待っていたのは、仲間たちの称賛と上司の説教であった。

2

新しきと古き、既存文化と異文化、世の中の明と暗が入り混じる町、イサク。

上司の長い小言から解放されたウイルは露店でキャンデーやチョコ、揚げ菓子を両手いっぱい買い込み、自宅に戻る道を外れある所を訪れる。そこからは子供たちの歌声とピアノの音が漏れ出している。扉を開けると十数人の子供と、ピアノを弾く笑顔の似合う温和そうな青年が楽しい歌を奏でていた。子供達は甘いお菓子の匂いに当てられたのか、ソワソワとウイルを見る。ウイルは壁際にある椅子に腰かけ子供達を眺める。少し悪戯な表情で。青年もくくつと苦笑いしながらもピアノを止めないでいた。曲が終わり子供達が一斉にウイルに駆け寄る。

「ウイル兄ちゃんだ」

駆け寄ってきた子供達の頭を撫でるウイルはとても嬉しそうだ。

「またそんなにお菓子を買ってきて」

「陽介、子供の頃お菓子を貰っても嬉しくなかったか」

そう言われ何とも言い返し辛いのか、少し困った様に陽介が答える。

「そりゃ、うれしかったけれど」

「お前の好きなマンジュウってやつもあつたぞ。食べるか」

笑顔でそう促すウイルにやれやれといった表情でマンジュウを受け取る陽介。子供達みんなとお菓子を食べていると一人の女の子がウイルに近づく。

「またウイル兄さんの歌、聴きたい」

恥ずかしそうに言う少女だったが、他の子供達からもリクエストが続く。そうかと食べかけの揚砂糖を口に放り込みウイルはピアノに向かう。

「わわっ、食べながらはやめてくれよ」

「ふあかつふえる」

「全然、分かってないじゃないか」

口の中を空っぽにしたウイルがポロンとピアノを鳴らす。

「大事にされてるな」

そう呟くとウイルはいきなりアップテンポなメロディーを奏でる。

「知ってる曲だ」

最近の流行歌。子供でも聴いた事のある曲を歌いながらサビの直前、ウイルが少し笑う。ピアノの音が既存のメロディーから抜け出した。

「違う歌みたい」

子供達はお菓子を食べる手が止まり、聞きなれぬ聞きなれた歌に引き込まれる。ウイ

ル自身も引き込まれ歌が飛び跳ねる。散々歌い終わると子供達のわあとした笑顔がウイルを包む。

「ウイル兄ちゃん。すごい」

子供達の惜しみない称賛に陽介も「そうだよ、ウイルはすごいんだよ」と子供達と同じようにはしゃぐ。ウイルはへへつと笑いながら新しい揚砂糖を袋から取り出した。

3

子供達と日暮れまで遊びつくした後、帰り際に陽介が尋ねる。

「セシルとは、最近会ってないのかい」

そう尋ねられたウイルは耳を掻きながら答える。

「会って無いな。それに会っても、何を話していいか」

「僕はねウイル。また三人でいられたらいいなと思ってるよ。形だけじゃなくて、そこそ昔のようにね。無理にそうしようとは思わないけど、僕がそう思ってるのは忘れな
いぞ」

そういうと優しい笑顔で「お菓子、ありがとう」と子供達の所へ戻って行った。

陽介の言葉がずっと頭を駆け巡りながら、ウイルは暗がりを歩く。街の毛色が変わってくるこの辺りは治安が悪く、街のゴロツキ達の溜まり場になっている。

薄暗い路地で淡いネオンが光るバーにウイルが帰ってくると、中からジャズの音色と

酒と煙草の香りがウイルを包む。カウンターでグラスを磨く初老の男はゆっくりとウイルを確認すると、またグラスを磨く作業に戻った。ウイルがカウンターに入り水を飲むと男が眩く様に尋ねる。

「また、あそこに行つたのか」

「ああ。やっぱり嫌か」

答えず黙つてグラスを磨く自分の父親に、ウイルはその真意を計れずにいた。答えを求めずにずっと過ぎたウイルにこれ以上聞くことも無かつた。

そのままカウンターにある階段から自室に帰ろうとすると客の一人がウイルに話しかける。随分と酔っている様だ。

「今日は歌つていけないのかい」

「ああ、ごめんな」

自室のベッドに横になり陽介の言葉を考える。「昔のように」とそのまま目を閉じ、あの頃のメロディーを頭で奏でながら眠りに付いた。

接触

1

2012年、宇宙移民計画発表。人類が新たな故郷を求め旅立った、歴史的な時であった。

2013年、グルームブリッジ恒星系にて初の移住可能惑星の発見。エデンと称され移民が開始された。

2014年、地球統合政府の体制に批判的な一部ゼントラーディ人によるテロ活動が過激化。これにより正規軍の拡大、傭兵組織の出現、軍需産業の飛躍に繋がる事になる。さらに地球への防衛ラインとして太陽系内惑星の地球化開発の後押しともなった。

2017年、各軍事企業の資金援助により火星の地球化計画が開始される。地球再生計画によるクローニング技術の流用により都市イサクが開発される。同時に旧サラ基地の復旧、改修が行われ火星開発は当初の予定よりも手早い結果であった。

2020年、イサクへの移住開始。地球での文化摩擦、一部地域での迫害なども手伝い多くのゼントラーディが移住した。

2026年、クローンによる遺伝子疾患の増加、他惑星からの外来種密輸により火星

環境の変化。火星各地に都市も広がり、良くも悪くも火星の発展に拍車をかける。

2030年、第二次マクロスステイ防衛線。以後、巨人サイズのセントラーディの地球居住が認められず、その一部が火星へ移り住むこととなる。先立って問題視されたクローン計画が終了される。

2047年、火星でウイルのピアノの音が今日も聞こえる…

2

ガヤガヤと騒がしい食堂の中、銀色の長い髪を揺らし歩く女性が、昼食をとる男の隣にキチリと立ち敬礼の後続ける。

「宇賀神大尉、午後からのVR訓練を新人を同伴した。パトロールに変更してもよろしいでしょうか」

大尉と呼ばれた男がゆっくりと水を飲むと笑顔を向け答える。

「ああ、いいぞセシル。ところで昼は食べたか。今日の陸海豚のステーキは格別に…」

「ありがとうございます。では」

言い終わる前にセシルは一礼して去って行ってしまった。

「いいんですか大尉。あんな好き勝手にやらせて」

「んん…」

大尉と同席していた若い軍人が尋ねると、たつぷりとソースがかかるステーキを頬張

りながら大尉が答える。

「いいんだよ。あいつはあれがいいんだ。最近の若いやつらは、やれVRや座学だの。大体パイロットつてもんは……」

分厚いステークを頬張りながらの説教が始まり、若い軍人は耳に痛い昼食になってしまった。

セシルが格納庫に着いた時、すでに新人二人がセシルを待っていた。片や小慣れた敬礼を、片や緊張を露わにする敬礼をセシルに向けていた。セシルが二人の前に立ち敬礼した後、緊張を露わにする青年に向け「名前は」と端的に問う。

「か……家鴨ナズです」

「自分は……」

小慣れた敬礼をする青年が名乗ろうとすると「お前には聞いていないぞ。CUCKO O」そう言われ青年が押し黙る。

「家鴨ナズ、カーティス・オート。今日から昨日までの事は忘れろ。お前達はここに飛ぶ為に来た。では、行くぞ」

機体に取り込み各自発進準備を始める。

「ところで少尉。先ほどのCUCKOとは」

オートはそれに慌てた様子も見せず誤魔化そうともせずについて、セシルが答える。

「前の部隊でのあだ名だそうだ。ずいぶん阿呆な飛び方したみたいだな」

オーツは淡々と準備を進める。

「だが、大尉はそこが気に入ったそうだ。準備は出来たか、コントロール」

「こちらコントロール。発進を許可します。お姉様、今度デートしてくださいね」

「ありがとう。暇ができたらね」

セシル発進時のお決まりの会話に、新人二人のみ違和感を感じつつ三機の戦闘機が火星の空を飛び立つ。

3

都市の発展というものは善悪どちらの手も加わるものである。新しい土地に新しい市場を見出し様々な者が腰を降ろす。ここ火星を例にとれば汚染された地球から農地を求め、地価の安さから一部企業が火星に進出し、人が集まれば衣食住の需要も高まる。しかしこの発展はいわゆる表の発展である。発展の騒乱に隠れ、裏の根もしっかりと火星に張り巡らされた。地球からも近く新体制の火星統合軍の緩さから密輸組織の拡大。反政府組織の拠点ともなり、正規登録されていない者の数も正規の者と比例して増えた。今こそあからさまに顔を出さないが、確かにそれはそこに存在した。

パトロールのルートを少し外れ飛ぶ三機の戦闘機。

「中尉、ルートから外れてますが」

「これでいいんだ」

真面目を人の形にした様な家鴨は不安そうに問うが、それを気にせず二人を先導するセシル。様々な木々が生い茂る異様な森が広がる地区に来たところでセシルの機体が速度を上げる。

「ついでに」

新人二人を試すように森すれすれを飛ぶ。所々突き出る背の高い木をパイロン代わりに小刻みにすり抜けながら抜けていく。そのまま森を抜け反り立った山をなめるように飛び上り、ガウオーク形態で山頂から二人の機体を見下ろす。家鴨はまさに教科書通りな癖の無い実に丁寧な飛行であった。反面、カーテイスは機体を傾け時には回転しながら飛行する。危ない飛行に思うが次の障害を前提に飛行しているのだろう、阿呆だがある種の優雅さを感じる。二人とも大尉が気に入るはずだと思っていると、はるか南に森すれすれを飛ぶ機体が目に入った。二人がセシル同様に山頂に着くと「不審な機体を確認した。行くぞ」と到着したばかりの二人を連れ不審機に接近していく。そこにはヌージャデル・ガーが一機で飛行していた。それを三機で囲みセシルが問う。

民間飛行区域以外に飛行船または各飛行可能機体が飛行する場合、許可証とそれにもなう信号の発信が義務でありそれに当てはまらない場合、多くは後ろめたい事である。最近ではこのようにあからさまな者は稀であるが。

「所属は。許可証の提示を」

だが、不審機からの返答はなくしばしの沈黙が空間を包む。各機の機体の音が響く中、森から鳥が飛び立った。その瞬間不審機が上空に飛び上り、銃撃を下にばら撒く。同時にセシルは銃撃の雨をすり抜けながら逃げる不審機を追う。新人二人は回避動作により出遅れる。そのまま最高速度で逃げ追うセシルと不審機。セシルのショック弾が不審機を襲うがそれをかわす。セシルの機体が民間飛行区域に突入したと警告する。荒々しい飛行はできない。速度を緩めたその時、白い機体がピアノの音と共に二機と交差する。

「危ねえだろうがっ」

ウイルが不審機に回り込もうと追いかける。その時、振り向きざまに銃撃をばら撒き煙を色濃く噴射するミサイルがウイルとセシルの機体を包む。そのまま飛び去る不審機を二人は見続ける事しかできないでいた。

「貴方、まだそんな事をやってるのね」

「お前こそ」

そのまま沈黙が続く中、新人二人が追い付いてきた。

「そんなものでは、どうにもならないって分かっているでしょう」とウイルに残すとセシルは二人を連れ基地へ向かって行つた。ウイルは何も言わずピアノを弾き続け、セシル

達を見つめていた。

「知り合いですか」

そう問う家鴨に一呼吸おいてセシルが答える。

「そんなものじゃない。帰ったら今回の報告書が山のように待っているぞ」

先ほどのウィルのピアノの音に色々な感情が溢れるのを感じながら、セシルが基地へ飛び戻る。

再接触

1

資料を見つめるセシルは実にいぶかしげな表情であつた。先日のヌージャデル・ガールとの接触時に記録した映像から所属の割り出しが行われ、名目上の状況報告という形で大尉に呼び出されていた。

「まあ、例によつて所属不明機だ」

資料を片手に大尉は冗談めかして笑う。

「今さらそんな事の為に。珍しい事では、むしろ所属がはつきりしている方が稀です」
「むしろこっちだ」

笑つていた顔が瞬時に鋭くなり写真を指さす。ヌージャデル・ガールの推進機構部分であつたが、セシルにはそれが何を意味しているのか分からずにいると大尉がさらに一枚の写真を出し説明を始める。

「これが標準のヤツだ。少し大ぶりだろう、問題はそこではなくこれが跡付けされた物では無いということだ」

「それはつまり」

「調べさせたがこんな開発をしたなんて記録は無い。どこかでこいつが一から作られて
いるって事だ。とてもじゃないがコソコソと運送業をやってる連中が作りましたって
代物じゃないんだよ」

「大規模な反政府組織の物だってことですか」

「そうだとしたら行動の説明ができないな。わざわざ改良した兵器をたった一機でフラ
フラさせておくのもおかしな話だ」

少しの沈黙の後、大尉が付け加える。

「まあなんだ、そんなに物騒で難しい話じゃないのさ。お前はいつも通りに好きな時に
飛んでもらって構わん。なんならもつと飛んでいいぞ。今回の事を上に報告したら駄
目とは言わんだらうさ」

「分かりました。では今から出てきます」

キチリとした敬礼の後、部屋を出たセシルを大尉は豪快に笑いながら「気を付けてな」
と見送った。

2

「ブロック、58番」

ウィルは作業の手を止めず視線も動かさずに、手だけ差出し要求する。ウィルの作業
を真剣な眼差しで見っていた幼げな青年はウィルの求める物を工具箱から探し出し手渡

す。工具と機体、その金属音のみが格納庫に響き青年は作業を眺めウイルは作業を淡々とこなす。そこに静寂の居心地の悪さは無く、二人にとつては実に充実した時間だけが流れる。ウイルの作業が終わったのはそれから一時間後だった。

「無理してまで付き合う事なかったんだ。昨日から寝てないんだろ」

「いいんですよ。ウイルさんの仕事は丁寧ですから機体の構造を把握するのにとても参考になります。それとガビーのチェック終わりましたよ、ウイルさんの機体に戻しておきますね」

「ガビーが戻ってくるのか、また機体の調整が忙しくなるな」

シャロン・アツプル事件以降、人工知能の研究は実にデリケートな扱いになっていたがそれでも科学者、技術者の活動は止まらず続いている。中には一般市民が趣味で作ったシステムが企業に買われたという話もあるほどである。シャロン・アツプル事件は人に恐怖を与えたと同時に技術の可能性も与えたと言つていいだろう。

「ウイルさんの飛行を処理しきれない所が多々ありました。どんな飛び方をしてるんですか」

「どんなって、機体の行きたい様に飛ばしてるだけだが。それよりストレンジさん、あんた俺よりだいたい年上なんだからそろそろ敬語で話すのは止めてくれないか。年上だつて事、忘れそうになる」

「これは癖の様なモノなんですよ。ウイルさんが慣れてください。それでは」

そう言つて自分の持ち場に戻つて行くストレンジを見ながら、「敬語より外見で忘れそうになるんだがな」と口には出せない台詞を頭に漂わせて「おう」と手を振つた。

整備の各報告を済ませ、だいぶ遅くなつた昼食を取つていると同僚が向かいの席に座る。

「また、そんなもん食つてるのか。男なら肉を食えよ、肉を」

男はテーブルにずらりと並ぶケーキにパイ、アイスクリームを甘つたるような表情で眺め珈琲をすすする。

「新しく入つた調理場の子は口説けたか」

「全然、まったく相手にされなかつた」

「また、協力してやろうか」

「お前の菓子を格納庫に運ぶ仕事なんてやりたかないね」

そう言いながら二人して笑いあう。

「お前の機体を簡易アーマードにしておいたぞ。多少は無理できるが無理はするな。機体を壊されちゃかなわん」

「機体と俺。どっちの心配をしてるんだか」

「機体が無事ならお前も無事だろう。そういう事だよ」

「またお互いに笑いあう。男は珈琲を飲み干し軽く手を上げ席を立つ。

「おう、気を付けてな」

3

「ありがとう、行ってくる」

オペレーターにいつも通りの台詞を投げかけてセシルの機体が空に飛び立つ。家鴨とカーティスの両名は先日の戦闘の結果より、大尉の訓練をたっぷり受けているところであった。いつも通りの一人でのパトロール中、エンジン音に混じりウイルのピアノの音が頭に響く。昔と変わらず力強いメロディーは軍人としてのセシルを過去に巻き戻す。速度を落とし操縦桿を握る指がリズムを刻みだした時、セシルが歌いだす。子供の頃、ウイルと陽介、それとウイルのお母さんと歌い演奏して、ピアノを弾くウイルはいつも変なアレンジを加えて陽介は新しい楽器を覚えてはウイルと弾き競って。私が口ずさんだメロディーを三人でああでもないこうでもない曲にして、それをメリルさんは楽しそうに見ていたつけ。歌と思えば晴れわたる空に心地良さを感じていたセシルを警告音が襲い掛かる。前方数キロ先に輸送艦が救難信号を発していた。速度を上げたと同時に通信が入る。

「お姉様。救難信号です、所属不明機に襲われている輸送船一隻。位置データ送ります」
「今向かっている、必要ない」

発見した輸送艦に二機のヌージャデル・ガーが張り付き、型落ちバルキリーが一機辺りを見張る様にその少し上空に位置取っていた。ヌージャデル・ガーは先日のカスタム機だと確認しながら気付かれた上空のバルキリーにセシルの機銃が咆え相手を横切る。弾の二つが右手右足に当たり、大きくバランスを崩したが瞬時にガウオークからファイターに変形しセシルの後を追ってきた。べたりと後ろに張り付く機体がセシルの行動を制限する。敵は攻撃してこないが型落ちとは思えない軽やかな動きを見せ、敵機にセシルは足止めされ続ける。輸送艦に近づこうも上手くいかない。今は攻撃されていないが隙を見せれば、という思いから

大胆な行動も取れずに時間だけが無駄に過ぎていく。「また私は何もできないのか」
と思った時、敵機が大きく回避行動を取る。敵機がいたであろう空間に弾がばら撒かれていく。

「遅くなりました」

カーティスは簡素な台詞だけを言い残し敵機を追う。カーティスは容赦なく発砲するがそのどれも敵機には当てられない。弾の合間を抜け輸送艦へ向かう敵機をカーティスは、ガウオークに足だけ変形し急速に方向転換させそれを追う。敵機の向かう先には輸送艦に張り付くヌージャデル・ガーと交戦する家鴨の機体があった。狙いは家鴨かとカーティスが速度を上げた瞬間、敵機がガウオークに変形し急ブレーキから後ろに飛

び上がる。視界から敵機が消え、目の前に飛び込む家鴨をすれすれで躲したカーティスであったが、そのまま敵機は輸送艦に張り付き輸送艦ごとフォールドした。

「何だったんですかさっきのは」

「すみません遅れてしまつて。それになんの手助けもできずに」

冷静に状況説明を求めるカーティスと焦つた様子の家鴨。先ほどの張りつめた状況からの落差に思わず頬を緩めそうになるが、すつと切り替えセシルは答える。

「いや助かつた、ありがとう。状況はお前たちが聞いたであろう事と差異は無い。これから戻り、フォールドした輸送艦を追うぞ」

型落ちの機体で最新鋭と渡り合う様な操縦技術を持つ者が密輸人にいるのか。さらに物資だけを奪わず、輸送艦丸ごと奪う事は前例がない。また頭の固いお偉いさん一人から十まで状況を説明しなければいけないのかと、気持ちが重くなりながら機体を基地に飛ばした。

ある昼下がりのひと時

1

「相変わらずバサバサな髪。いつも埃と油まみれだからよ」

「それが俺の仕事だろうが」

ウイルは滑走路の側で髪を切ってもらっていた。ここに入った時、伸ばしっぱなしの髪を琴音に注意され半ば強引に切られた。ここには身なりをキチンとしましようなんで学生のようなルールは無いのだが、長い事放置されたであろう髪と油まみれのヨレヨレのつなぎ。それはファツションをこよなく愛する琴音のルールに触れたようであった。それからというものの「また髪が伸びてきてる」とか「ちゃんと毎日洗濯しなさい」などとウイルに口うるさく注意していた。そのやり取りは姉弟の様であり、周りの人間も面白い見世物を見るように扱っていた。

「大体、ウイルは無頓着すぎるの。もつとキチンとした恰好したらきつと女の子はほつとかないわよ」

「そういうものか。よくわからん」

琴音はハサミを動かし溜息をつきながら言う。

「そうね、星間戦争の映画観た事あるわね。リン・ミンメイが今のウイルみたいな油まみれのつなぎ着て髪もボサボサで歌ってたらどう思う」

「いい歌は全てに平等だ」

ウイルはポケットから飴を取り出し口に抛った。

「ウイルの感覚じゃね。けど他の人が観たら感動のラストも台無しになっちゃうのよ」

琴音もウイルのポケットから強引に飴を取り出し口に運ぶ。

「終わったわよ。ちゃんと後ろはまとめられる様に残したから」

琴音が言い終わる前にウイルは後ろ髪をまとめて縛る。

「やっぱり、それも切った方がいいわよ」

「毎朝、洗面台の前でまとめるとな、一日が始まるぞつて気分になるんだよ」

「ああ、そういうのはちよつとわかるな」

「それにな、あんまり切りたくないんだよ。ありがとうな、また切ってもらつて」

そう言いながら黒髪に混じる一束の銀髪をウイルが撫でる。「そうね」と笑って見せるウイルに、琴音も笑ってみせた。

2

「出撃許可が出ないとはどういう事です」

いつもは賑わいを見せる昼食時の食堂は、怒号の様な一言で静まり返っていた。

セシルが食事中的大尉に食って掛かっていた。

「あの後、フォールド先の調査が入った。どうやら複数回の近距離フォールドを使って目くらましをしてたようだな。大体の予想は付いているが曖昧な情報でお前達を向かわせさせる訳にもいかん」

「それでは輸送船の乗組員はどうなるんです」

セシルの言葉がより強くなる。大尉は眉ひとつ動かさずにゆっくりとした凄みを効かせながら話した。

「連中はわざわざ乗組員のいる輸送船を襲ったんだ。そして、物資だけを奪わずに乗組員ごと強奪した。わかるか。物資と乗組員、どちらが重要だったかはわからんが強奪しても困らないから強奪したんだ。生きた人間を自分の巣穴に持ち込む利点なんてこれっぽちも無い。俺なら乗組員を殺して物資を奪うか、そもそも輸送船ごとフォールドさせてまで奪ったりはしない」

「つまりどういうことですか」

「労働力として使う事が目的か、奴隷として売り飛ばす。少なくともわざわざ持ち込んで殺すなんて事は薄いと思うぞ」

その話に納得のいかない表情で押し黙るセシルに大尉は続ける。

「少なくとも今の状況で大々的な人数を出して救出に向かうなんて事が出来ない。い

や、させてもらえない。そんな人員も腕の立つパイロットも少ないからな」

そう言いながら大尉は周囲の人間に目をやると、バツが悪そうに目を背け中にはそのまま逃げ出す様に退室する者もいた。

「確かな情報と人員が確保できないと出撃はできないと、そういう事ですか」
「ああ、そういうことだ」

大尉はそのまま食事に戻る。セシルは数秒ほど何か言いたそうに押し黙るが、一礼し食堂を出て行った。

「いいな、若人ってやつは。向こう見ずで無鉄砲で、見守りがいがあるな」

近くに座って固まっていた隊員に大声で笑いながらそう言つた大尉であったが、隊員は固まったまま苦笑いを浮かべ頷く事しかできないでいた。

「家鴨、ククー。今日も飛ぶぞ、何をしている早く準備をしろ」

自室でくつろいでいた二人に、ノックもせず立ち入つたセシルの声が響く。

「今日もですか」

「自分はそう呼ばれる事に決まつたのですね」

早々に準備を始めるカーティスと慌しくも急いで準備をする家鴨。人を救う手段が無いのであれば作つてやる、セシルは二人を連れ格納庫へ向かう。

「やあ、随分とさっぱりしたね」

ウイルは陽介の所に訪れていた。勿論、たくさんのお菓子を抱えて。

「どうだい。仕事は」

「一段落ついたから来たんだよ。また明日から忙しくなる」

「忙しいのはいい事だよ」

「そつちはどうなんだよ」

「なんとかやつていけるよ、そのことなんだけどね」

陽介は孤児院をしながら作曲家としても活動している。提供した曲が銀河ヒットチャートに入ったこともあるほどだが、人前に出る活動の時間を全て子供達に使うため名前だけが一部の人間に知られているだけであった。

「今度、月に行かなくちやいけなくなつたんだ。気難しい人でね、曲は気に入つたけれど作つた人間の話も聞きたいっていわれてね」

「そりゃいい。ついでもっと仕事もらつてこい、子供達にもっと美味しい物食わせられるぞ。それで、その間の子守りをしてればいいんだな」

二人の会話を拾つた少女が子供達の輪の中から抜け出し駆け寄る。少女は陽介の服を掴むと泣きそうな不安な顔で見上げる。

「陽介兄さん。どこか行つちやうの」

その表情に陽介が何か言いたそうに言えずにいるとウィルが少女を抱き上げる。

「陽介はお仕事だ。たくさんの人に陽介の曲を聴いてもらうんだ。すごいだろ」

そして少女の頬をふにふにと触ると、くすぐったそうに少女が笑う。その光景に陽介が安心したように笑う。

「その間は俺がいるから。なんなら遊園地にも行くか」

遊園地という単語に反応した子供達が集まり賑わう。

「ははっ、陽介。予定が出来ちまったから安心して行つてこい」

ウィルから降りた少女が「陽介兄さんとも行きたいよ」と言った。

「ごめんね。じゃ今度はみんなで行こう、今回はウィルと楽しんでおいで。みんなが楽しんでお話を楽しみにしておくから」

少女の表情は明るく笑顔だった。

過去と未来に思い寄せて

1

窓から見える宇宙にはごつごつとした岩と、何か機械の残骸が見える。なんら変わりの映えのない風景だが陽介はこの風景があまり好きではなかった。火星でも小規模のテロはある。しかし、その痕跡は時間と共に人の手が入り消えていく。記憶は残っても惨状は消える。今見える物は過去に行われた戦争やテロの残骸だ。宇宙に漂うそれは、いつまでもこれからも残っていくのだろう。

月までは数度のフォールドを駆使しても数時間掛かる。固い座席で窓を眺める陽介は思いのほか自分が疲れていた事を実感する。普段は子供達の騒がしさと笑顔に隠れていたが、少し頑張り過ぎていたのかもしれない。これから仕事もあるんだと座り心地の悪い座席に身をよじらせながら、陽介は昔の夢を見る。

銀河標準時2032年、火星が冬期に入った頃。幼い陽介は冷たい路地裏に横たわっている。両親がテロに巻き込まれ亡くなって何日たったのだろう。たった一発のミスイルが建物を崩し、そこに陽介の両親がいた。死に際も遺体も見れずにただ亡くなったと告げられた幼い陽介にはその意味がよくわからずにいた。軍に保護された後、何度か

見たことのある大人達の姿が見えた。陽介に会った彼らは口々に「残念だった」などの言葉を向けたが、それに言い知れない冷たさを感じて施設から逃げ出した。大人達の疎ましさや煩わしさが陽介に伝わっていたのかもしれない。勿論、大人達にもそれ以外の心配や労いの感情はあつたのだろう。しかし、陽介は負の感情に敏感に反応してしまつた。走つて走つて、夕方までまだ日はあつたが、それでも薄ら暗い路地裏の隅で隠れるように潜り込んだ。とにかく誰にも見つかりたくなかつた。そのまま心と体の疲れから眠つてしまつた。

冷たさと体の痛み、眩しい位の朝日で目を覚ました陽介であつたが、胸に大量の砂を詰めた気分はどうする事も出来ずに座り込んでいた。

「あら、どうしたの。こんな所で」

路地裏に差す光を全身に纏う様な女性が陽介に近づきしやがみ、話しかけた。昨日の大人達と違う優しい雰囲気になかなか言わなければと口を開いた時、お腹が鳴つた。

「ふふふ、楽しくても悲しくてもお腹はすくものね。おいで」

そう言つて差し伸べる手に陽介は素直に受け取る、受け取りたくなつた。手を引かれ路地を抜けた先の建物の中に入ると大きなピアノがある。

「さつ、手を洗つてらっしゃい」

促され手を洗っていると、男の子が階段から降りて来てピアノの前に座る。寝起きな

のだろ。うぼさぼさな髪に乱れた服装、歳は同じ位だろうかと陽介が考えていると。ダァンと鍵盤を弾いた後けたたましいメロディーが流れ、それを陽介は手を洗うのも忘れ立ち尽くし、聞き惚れた。弾き終わった男の子はバリバリと頭を掻きながら陽介に近づく。

「んっ。おはよう」

「お、おはよう」

まるで知り合いに挨拶する様な自然なおはように思わず返し、そのまま顔を洗う男の子を陽介は不思議に思っている。

「おはようウイル。今日はそんな気分なのね」

二階から降りてきた女性は「ご飯よ」と言いながら二人を連れそう。テーブルには色鮮やかに調理された野菜が並んでいる。席に着いた陽介は頂きますを言うと、目の前のスープを口に運ぶ。野菜の甘みが広がる暖かいスープに、陽介は思わず泣き出してしまった。あらあらと優しくなだめる女性と黙々と食べるウイル。食事の後、途切れ途切れに事情を話す陽介に優しく微笑み聞く女性は母のそれであり、陽介は次第に心が落ちていく。着いていった。

「陽介君、ここに住まない。部屋は沢山あるんだけど、私もなかなか帰って来られないからウイルが心配なのよ。お願い出来るかしら」

それは決してお願いなどではなく、差し伸べられた手段であることは幼い陽介にも分かった。そして、それしか手段が無い事も理解していた。陽介がコクリと頷く。

「よかった。改めまして、私はメリル・アームストロング。この子はウイルよ。これからここはアナタのお家よ」

そうやって二人を抱き上げくると回るメリルは心底楽しそうだった。

勝手にバルキリーを乗り回したり一日中ピアノを弾き競った事もスラム街で絡まれたセシルを助けた時も、今では陽介にとつて大切な思い出であった。束の間の就寝の時間でさえ昔の夢を見るほどに。

2

陽介が出掛けたその日の昼。子供達と陽介と見送ったウイルはそのまま会社に来ていた。軽い整備状況のチェックと報告の為である。

「何やってたのよ。この私をほっぽり出して、埃が積もっちゃうでしょう」

ガビーがコックピットからやかましく騒ぎ立てる。

「悪い悪い。けど昨日も飛んだだろうが」

「あの位じゃ私は満足できないのよ。早くアナタの操縦を覚えないとストレンジ君に悪いじゃない」

相変わらずのやかましさと同時にストレンジさんを君付けで呼ぶなんて相変わらず

命知らずなヤツだと思いつながら「今から用事だ」と丁寧な飛行は断った。

「あらそうなの。デートにでもいくの」

「そんなもんだ」

「じゃ、明日の私とのデートも期待してるわね」

ウイルは「何の事だ」と尋ねたがそこから返事は返ってこなかった。そんな約束してたかと疑問に思いながらウイルは報告の為に格納庫を後にする。

ウイルが赴いた部屋には週刊誌を顔に乗せたまま椅子に座る男がいた。男は入ってきた人間を確認もせず話し出す。

「明日はあそこの子供達と遊園地に行くんだってな」

机に足を投げ出しだらけた態度と服装で尋ねる男にキチリと直立したウイルが答える。

「はい。機体と作業のチェックは終わっています。明日は子供達と楽しんできます」
笑顔で答えるウイルに男はけだるそうに週刊誌を落しながらウイルを見た。

「いい知らせだウイル。明日、仕事が入った」

「いや、だからちゃんと休み取ってますから」

焦るウイルに男は構いもせずに続ける。

「遊園地でフライトショーの依頼だ。人員と機体の手配は済ませてある。どうせお前の

事だ、子供達に自分の仕事がどんなもんか話した事も無いんだろ。いい機会だ、話すよりも手つ取り早いだろ」

呆氣にとられるウィルを面白そうに眺めた男は実にいい笑顔である。

「行くヤツを募つたらな、驚くほど盛況だ。遊園地で子供達と楽しく遊ぶお仕事だ、俺も行きたい位だ。仕事だから給料も出るぞ、手抜くなよ」

「ありがとうございます、社長」

社長はおうおうと手を振りウィルを茶化し照れ隠しする。ガビীর言っていたデー卜ってのはこれかと少し可笑しくなりながら社長に一礼し部屋を出る。

戻った後、明日のフライトショーの事を話すと子供達に楽しみが増えた。子供達の笑顔にウィル自身も楽しみになる。明日は皆で遊園地だ。

快晴の遊園地

1

とても、言いようの無いほどの快晴。子供達の家には大型の車が着いた。

「ウイル、おおいウイル」

男は実に楽しそうにドアを叩く。ドアを開けるウイルは反対に不愉快そうだった。

「やかましいぞフラック。よりによってお前も行くのか」

「いいじゃないか。たまには安全に空を飛んでみたいんだよ」

へへつと互いに笑うウイルとフラック。子供達が我先にと家から飛び出し嬉々として騒ぐ。遅れて少女が家から出てきた時、フラックは少女に跪く。

「こんにちは、お嬢さん。ウイルの友達のリックです」

リックが空の手のひらを見せ握り開くと飴が溢れでた。「どうぞ」と本人は爽やかだと思つてゐる笑顔を向け飴を差し出す。少女はウイルの後ろに隠れてしまった。

「振られてるじゃねえか」

ウイルが飴を二つ取ると一つは自分の口に、一つを少女に手渡した。

か細い声で照れながら「ありがとう」と言う少女にフラックは「いい一日にしよう」と

返した。同じように子供達に飴を配りながら手際よく車に乗せ、ウイルが助手席に座ると車を出した。

「あの子は将来美人になるぞ」

「女を見る目だけは一級品だからな。ありがたく受け取っとくよ」

「バルキリーの操縦だって一級品だろうが」

「だったら俺の仕事も減るんだけどな」

子供達に負けない笑い声を上げる二人と子供達の乗った車は遊園地に向かう。

遊園地に着くとウイルの見知った顔がかなりの数いた。ウイルを見付けたストレンジが駆け寄ってくる。子供達に挨拶をしている彼は最年長の子と同年代に見えた。

「僕に隠れてこんなかわいい子供達と暮らしてたんですね」

「普段は暮らしてませんよ。友人の代わりです」

ストレンジの顔はどこか悪戯めいており、それをわかつてはいたウイルだったが真面目に答えてしまう。

「各機の調整は済ませてあります。今日は一曲お願いしますね」

ストレンジが指さす先にはウイルの機体があった。残りの二機がウイルと同じカラーリングになっていた。

「同じ機体にはできませんでしたが、と言うよりウイルさんの機体は改造され過ぎてい

て同じ機体を作るのは無理でした。フラックさんとルカンさんが一緒に飛んでくれますよ、彼等ならウイルさんの飛行にもついていけますから」

ルカンも。辺りを見渡すとすでに子供達に懐かれたルカンの姿があった。熊の様な巨体に伸ばされた髭、されどその朗らかな物腰は子供達から見れば遊園地のマスコットに見えるのだろうか。

「すごい人気ですね。私達からみたら怖いおじさんですが、何か惹かれるものでもあるのでしょうか」

マイクローン化した純血のゼントラーデイである彼だが子供達と戯れる姿は戦闘種族と呼ばれる事に違和感を覚えるほどである。

「ルカンはいいヤツだからな」

「それは知ってますが」

「一緒に遊んでる一番ちっちゃいのがいるだろう。アイツはあの中で一番臆病で人見知りなんだ。それがあの子だ、だからいいヤツなんだよ」

ストレンジは可笑しそうに笑うと子供達の輪の中に入っていく。ウイルもそれを追いかける。

2

「デフォールド反応。E-67地区に向け降下しています」

パトロール中のセシルに通信が入る。瞬時に飛行ルートを切り替え速度を上げる。

「少尉、また例の機体だったらどうします」

カーティスの冷めた口調がセシルに向かう。

「なんだ、自信が無いのか」

「ええ、まったく」

「自信なんか後から付いてくる物だ。守りたい人の事だけ考えて飛べ」

三機はさらにスピードを上げる。

「少尉は精神論が強いですね」

家鴨がこっそりとカーティスに通信を送る。

「ああ、だがそれに伴う努力や鍛錬を知っている。信頼してますよ」

カーティスは通信をオープンにしていたらしく、セシルに筒抜けだった。

「家鴨、帰ったら腕立てだ」

機体は空を飛ぶ。

3

お昼時は食べ物の露店がガヤガヤと活気付く。香ばし香りとジユワつと焼ける音が遊び倒した体に食欲を芽生えさせる。

「じゃ行ってくるぞ」

食事もそこそこにウイルが席を立つ。食事と言っても甘味の類であったが。

「こんなにかわいい子供達の前でへましないように」

同じように席を立った琴音がウイルの襟元を正す。

「いつか聞こうと思ってたんだが。なんで社長の服装は咎めないんだ」

「社長はあれがいいの。逆に考えてみなさい、あの社長がパリツとしたスーツに整えた

髪型。想像できる」

「ああ、納得した」

琴音がウイルの背中を叩く。

「行つてきなさい」

ウイルは「おお」と手を振つて機体に向かう。

「琴音さんはウイル兄ちゃんのが好きなの。奥さんみたいだった」

女の子が琴音に尋ねる。年頃の女の子らしい話題だった。

「ちよつと違うわね。勿論好きよ、けど恋人だったり結婚したりつて事じゃないのよ」

女の子がよく解らなそうな顔をしているのを琴音は微笑ましく見つめる。

「アナタはウイルが恋人になつて欲しい」

「ウイル兄ちゃんはみんなのウイル兄ちゃんだよ」

「ふふ、そうよね。けど大好きでしょう。そういう事よ」

機体に乗り込んだウィルにガビーが話しかける。

「随分楽しかったみたいね。顔が緩んでるわよ」

ウィルは不可解そうに首を傾げる。

「冗談。こうでも言わないと腑抜けた操縦しそうだったからよ」

ウィルは機体のチェックを進めている。

「ちよつと、聞いているの」

「ああ、今日はちよつと激しくいくぞ」

そう言つて顔付きが変わる。

『それではタチカホフによりますフライトショーの時間です』

簡素なアナウンスと共にウィルを含めた三機が大空を飛ぶ。ウィルは通信をオープンにするとそつと鍵盤を撫でる。ダダンつと軽快なピアノの音と共に戦闘機が空に舞い、ウィルの機体が雲を引いていく。その雲をなめる様にフラックとルカンが続き雲をぼかしていく。聞きなれたピアノの音を子供達は空を見上げながら聞く。空に描かれる戦闘機の軌跡をウィルが作っているのだと不思議そうに、そして誇らしげに思う。

曲が途切れた。

その瞬間、ウィルの機体は活動を止め空からひらりと落ちる。観客達はハツと声を上げる。ひらりひらりと落ちる機体がドーム状の建物に激突しそうになった瞬間。機体

は目覚めガウオークからドームの曲面をなぞる。

ホツとする観客。その反応を予想してへへつと笑ったウイルだったが。

「統合軍より通信。未確認の機体がそちらに向かっている、直ちに避難を」

ウイルの通信から遊園地に響いたそのアナウンスは、観客を混乱に落とすのに容易であつた。曲が止まり遊園地には悲鳴が上がる。琴音達は逃げ惑う人から子供を守るのに必死だつた。手持ちの通信機でウイルに通信を送る。

「何してるのウイル。早く離脱しなさい」

「いや、無理らしい」

ウイルの機体が建物を庇うように立ち塞がると轟音が遊園地に響く。ピンポイントバリアで機体の損傷は無いが、ウイルの目の前には数機のバルキリーとヌージャデル・ガー、クアドラン・ローの姿も見える。

「俺たちで時間を稼ぐ。早く非難を」

「そんな事言つても、武装もしてないんでしよう」

「フラック、ルカン」

「フライトショーにそんなもん積んでるわけないだろう」

「機体がいつも通り動けば問題じゃない」

「だそうだ。はやく非難しろ」

「いいけど、この子達を悲しませないでよね」

「当たり前だ」

ウイルがゆっくりと深呼吸をすると敵機が遊園地に距離を詰める。

「ガビー、相手のチャンネルに潜り込めるか」

「何言ってるの。出来るかかじゃなくてやれでいいのよ。出来ないと思ってるわけ」

「そうだったな。フラック、ルカン。出来るだけ時間を稼ぐぞ」

「お前が仕切るのかよ。まあいいさ、たまには安全に飛びたいもんだ」

フラックとルカンが左右に散開し敵機に突っ込む。ワントンポ遅らせウイルが並びの濃ゆい箇所へ突っ込む。

セシル達の到着まで後、160秒。

まだ知らぬ未知の物

1

たった一発。そう、たった一発の銃弾は沢山の物を壊す。思い出の場所も大切な人も。

ウイル、フラックとルカンはただただ弾丸の雨を防ぎ躲しつ続ける。迎撃する事も撤退する事も出来ない彼等はひたすらに敵機のかく乱と施設の防御を避難が終わるまで続けなければならぬでいた。

「いつまで続けんだ。そろそろ辛くなってきたぞ」

それほど時間が経っている訳ではない。けれど、減らない敵機と銃弾。遙かにも永く感じる一分を全力で動くのは精神を削る。

「いつまでも続けるんだ。いつもの事だろう」

ルカンの通信から聞こえる銃声とフラック自身に飛び込む銃声が重なる。一機ごとの技量はさほどでもないが物量に跳きそうになる。

「チャンネル繋いだわよ。早く、早く早くしなさい」

ガビーが捲し立てる。ダラララと鍵盤を撫で弾いたウイルは銃弾の連射に合わせた

テンポでピアノを弾き叩く。

「お前は熱気バサラじゃないんだぞ」

「やってみないとわかんねえだろ」

怒鳴るフラックに怒鳴り返すウィルは一つ深めの呼吸をした後に歌い始める。

「:For example」

歌いながらも操縦の手は止めない。曲に合わせる様に旋回し敵機の隙間をくぐり抜ける。ヌージャデル・ガー数機の動きが鈍るが、ほんの僅かな鈍りである。その僅かな瞬間、ルカンがアサルトナイフをヌージャデル・ガーの右腕関節部を襲う。そのまま蹴飛ばし腕付きのマシンピストルで敵機密集地に向け発砲する。

「流石。弱音吐いてた俺が惨めに見えるね」

「お前はいつでもそうだ。心配いらぬ」

僅かにウィル達に戦況が傾くかと思われた時、クアドラン・ロー三機が車を襲っていた。シエルターに避難せず車で逃げ出した者がいたのだ。

「おいおい、やばいぞ」

いち早くそれを察知したフラックが急加速で向かう。ルカンが加勢しようと体勢を変え、一機のバルキリーがウィルに張り付く。

「何なの何なのこいつ。ひっ付いてくるんじゃないよ。あっちいけ」

ガビーがやかましい。べつたりとウィルに張り付く敵機に気付いたルカンに取れる行動は施設の防衛だけであった。

べつたりと張り付く敵機はウィルの変則飛行にも難なく着いていく。敵機の銃弾を縫い飛ぶ様に飛行すると邪魔だと言わんばかりに仲間に発砲する。

何なんだこいつは。

それでも他と比べ明らかに卓越した操縦技術にウィルは手を抜けない。

「ねえ。それなに」

聞きなれない声の通信がウィルの耳に入る。こいつか。張り付く敵機からの通信だと気付き、そのまま遙か上空まで機体を登らせる。遊園地が霞むほど上がった所で曲を止め、敵機と対峙する。

「ねえねえ、それはなに」

若いと言うよりは幼いといった声と口調でそのパイロットが尋ねる。子供なのか、通信は音声のみで真意は解らない。

「何なのって聞きたいのはこっちなよ」

ガビーがたまらず口を挟んでくる。まさにウィルの聞きたい事であったが相手が答えるわけがない、ウィルはそう考えていた。

「僕、僕はただ人間を連れてこいって言われただけだよ。あれ、言つてよかつたのかな」

「何なのそれ。アナタ自分のやってる事よくッ…」

ガビーがやかましく捲し立てていた時、左から銃弾が飛んでくる。それを感知していたらしく敵機はウイルの目の前から即座に離脱する。

「今度は私が追い回す番だ」

セシルの機体が敵機に張り付く。ウイルもそれに着いていく。

「何なんだそいつは」

怒鳴るウイルにセシルは答えない。答えないと言うよりも聞こえていない様であった。

「ああもう、面倒だな。お兄さんまた来るよ」

通信が開いたままの向こうから幼い声が届くと敵機が急速に止まり、ガウオーク形態に変形しながら後方に飛ぶ。

「そこだッ」

セシルの機体がほぼ同時に変形しながら下方に飛び発砲する。流れる様に一直線を描いた連射が敵機に被弾する。バランスを崩しながらも、そのまま雲に隠れる様に姿を消した。ウイルはすぐさまに遊園地に向かうとそこに敵機の姿は無く、統合軍のバルキリー二機の姿が増えていた。

「この説明はあるのか」

「むしろこの状況の説明をしなければならぬのはお前達だ。だが統合軍を代表して今回の協力に感謝する」

「感謝されるような覚えはないぞ」

ウイルが当たり前の様に言い放つとセシルが少ししおらしく答える。

「…そうね。ウイルはできる事をしただけだもの。家鴨、ククー。民間人の保護を最優先に行動しろ」

「大丈夫です。民間からの協力もあつて順調に避難がされています」

ウイルにも通信が入る。

「ウイル。子供達は無事よ。今ストレンジさんの所にいるから」

子供達の無事にそつと安堵する。同じくその通信を聞いたセシルも。

「私は戻る。早く子供達に顔を見せてやれ、心配してるぞ」

言うより早く機体を飛ばしたウイルを眺めて、セシルも機体を飛ばす。

機体を降ろし足早にテントに向かう。テントにいた子供達はウイルの顔見た瞬間に泣き出してしまった。

「あらあら、さつきまで大丈夫だったのに」

「ウイルさんの顔を見て安心したのでしよう」

ウイルは子供達をギュウと抱きしめると「怖かった」「ウイル兄ちゃんが無事でよかつ

た」とわんわん泣き、それを聞きながら頭を撫でる。事態が落ち着いた頃には夕暮れになつていた。

フラックが代表として統合軍に行く事になりウイル達は帰路に着く。子供に配慮してだろうカルカンや琴音、ストレンジまで着いてきた。よほど疲れたのだろうか、ルカんと琴音が子供達の相手をしているとみんな眠つてしまった。ルカんと琴音も一緒に。

「いつもこんなに賑やかなんですか」

ストレンジとウイルはテーブルで話していた。

「大体は、今日みたいな事は初めてだけどな」

「知られざるウイルさんの一面でした」

「あまり話すような事でもないだろう」

そう言つてテーブルにグラスを置くとピアノの前に座る。しつとりとした曲が流れる。

「言つてくれれば私達も手を貸しますよ」

そう言つたストレンジの言葉にウイルはピアノを弾きながら答える。

「たまに、気が向いた時に遊びに来てくれるのは構わん。子供達も喜ぶ。けど手を貸すつてのは駄目だ。ここはそんな所じゃない」

「ふふ、怒られてしまいました。そうですね。ここはそんな所ではないですね」

ストレンジはグラスを傾け、ウイルの落ち着いた音色は続く。

2

朝、扉が開く音が響く。よほど急いで走ったのだろう、息を切らせた陽介の姿がそこにはあった。ソファで寝ていたウイルが目覚める。一直線にウイルに向かった陽介がウイルを殴る。扉の音で起きた子供と琴音が、降りる途中の階段でその光景を見てしま

う。
「僕は怒ってるよ」

「だから、素直に殴られた」

陽介の口調は強く、ウイルは申し訳ない表情が滲んでいた。

「じゃ次はウイルの番だ。理不尽に怒ってる僕を殴れ」

返事もせずウイルが陽介を殴った。子供達と琴音は驚愕の顔でこの光景を見る。

「みんなは無事なんだね」

「ああ、無事だ」

陽介はへたり込むと「良かった」と絞り出した。へたり込む陽介に子供達が飛び掛かる。口々に自分達の無事と恐怖感、陽介の帰宅を喜ぶ。

「随分乱暴なコミュニケーションなのね」

琴音はウイルの隣に來ると茶化すように言う。

「分かり合えないよりはいいだろう」

そう言って子供達と同じように陽介に飛び掛かり髪をぐしゃぐしゃにする。

「ホント、男の子ってやつは」

そう言いながら寝たふりをしていたストレンジに目配せを送る。

理由の理由

1

慌しい格納庫、活気溢れる声がそこかしこで聞こえる。真新しい機体の光沢が光る。

「新しい機体が来ると、こう、なんとさえいいんだ。誇らしいというか晴れやかな気分になるな、おいつ」

宇賀神は腕を組みながら機嫌が良さそうに大笑いする。対するセシルはどこか納得できない表情である。勿論、性能の良い機体が増える事はセシルにとって喜ばしい事ではあったが、どうにも腑に落ちないでいた。

「上をどう丸め込んだんです」

「簡単な事だ。最近何かと物騒だから新しい機体をくれって頼んだのさ。どうせ16も持て余してるんだろう。見ろ、この23を」

「ファルシオンを引っ張つてきた時にも言われていましたよ。仕事に興味を持ち込むなと」

そう言うと、より一層の大笑いをする宇賀神に何がそこまで可笑しいのだろうと考えだすセシル。

「いいだろう。成果はちゃんとあげているんだ。この位の融通は聞いてもらわんと」

いつも豪快で仕事にも実直で信頼できる人間、それがセシルの宇賀神に対する印象であった。しかし、戦闘機乗りとしての彼への印象は全く違うものであった。どこから持ってくるのか各種様々な機体を調達してくる。最新鋭機からカスタムされた型落ち機まで、それを訓練生の練習機として貸し出すのはいいのだが傷を付けたら何を言われる分らないと教官達も苦い顔をしていた。つまり、生粋の戦闘機マニアである。

「一機ならともかく四機もよく揃えられましたね」

「言っただろう、物騒だからと。ちゃんと今の状況とその対策を説明してやれば、この位揃うものなんだよ」

おそらくは脅迫と強行だったのだろうとセシルは思ったが口には出さずにいた。それでも戦力が上がる事に違いはなく先日未確認機への手応えを思い出し、確かな自信を芽生えさせる。

「そういえば小僧と久しぶりに飛んだんだろう、どうだった」

「いつも通りですよ」

ウィルは機体の試験飛行時よく飛行空域から外れて飛ぶ。勿論、わざとではない。

「機体がそっちに行きたがるんだ」

それがウィルの言い分である。今こそそれは少なくなつたがセシルが軍に配属され

る前、ウイルが今の仕事を始めた時に宇賀神はウイルを追いかけまわしていた。飛行禁止空域を飛ぶウイルを追いかける内に顔見知りになり、セシルが配属された時に知り合いだと知り無理やり自分の下に就け、半ば強引に押し付けたのである。

「いつも通りに、お前と敵機についてきてたのか」

セシルは何か言いたげに口を開くが何も言えずに黙る。

「そういう事だ。それに対して言い訳も逃げもしない事は評価してる。頑張れとは言わん、やってみろ」

そう言つてセシルの背中を叩く宇賀神は楽しそうに大笑いする。何がそこまで可笑しいのか、けれど力強い言葉にセシルの顔もほころぶ。

2

「ねえウイル。君は何で歌ってるの」

ウイルと共に食事を取っていた陽介が出し抜けに聞く。上品に盛られたスパゲティを突く陽介。ウイルはサラダにフォークを突き刺しそれを口いっぱい頬張る。

「んつく、なんだいきなり」

よく噛まずにサラダを飲み込んだウイルは不思議そうに答える。本当に不思議そうな顔だ。

「いや僕がそう聞かれたんだよ。この前、月に行った時にさ」

「それで」

「曲は素晴らしい、けどなんで自分で歌わないのか。貴方は何の為にこの曲を作ったのか。そう聞かれた時にさ。あれ、なんでなんだろうなんて考えちゃって。別に理由なんていらぬのは分かってるんだ、あえて言うなら作りたから作った。けれどその人の中では、お金とか人気とかそういう物が歌にくく付くと思ってるみたいだね」

ポウルいっぱいにあつたサラダがみるみるウイルの口に運ばれてゆく。

「それは間違つてないだろう。歌は買われる物だし、好きになつてくれる人も出てくる」
コップを傾け喉を鳴らすとまた口いっぱいには食べ物を詰め始める、頬にはスパゲティのソースを付けて。対する陽介は実上品に食事を続ける。

「それは分かつてるさ、僕だつてそれでお金を貰つてるからね。ただ改めて聞かれた時に自分が人に説明できないなと思つて。それで聞いてみたんだ」

くるくると巻かれた完璧な一口サイズのスパゲティを陽介は口に運ぶ。早々に食べ終わったウイルがカランとフォークを皿に抛ると席を立ち、キッチンに珈琲を淹れに行く。ポットに火を点す。揺れる火を見ながらウイルはそつと話す。

「そうだな、俺も上手く説明出来ないが。歌うと自分が分かるんだ、俺はこういう事が言いたいんだ、こういう事を思つてるんだつて。そうしたら今度は相手も返してくれる。手拍子だったりゆつくり昼寝したりして。そうするとまた自分が分かるんだ、その線

り返しだ」

「それがウイルが歌う理由かい」

陽介が興味深そうに尋ねる。そういえばウイルと真剣に「歌う理由」について話した事が無かったなと陽介は思った。歌で喧嘩になるほど話した事はあるのだが。ウイルははぐらかす様に答える。

「そうだな。考えたらまだまだありそうだが、今思いつくのはこんなもんだ。だから歌って金を貰う事や、ちやほやされたいって思う事は変な事じゃない。むしろ純粋な事だとおもつ、おおつと」

ポットが激しく音を立てる。ウイルは火を止めると珈琲を淹れる。

「飲むか」

「貰うよ」

テーブルにカップを二つ並べ、椅子に座るなり珈琲に何個も角砂糖を沈めるウイル。「ウイルの事は結構理解してるつもりだけど、そればかりは理解できない」

そう言つて珈琲を飲む陽介に「美味しいぞ」とウイルは珈琲を啜る。

3

ベッドに寝転ぶ少年。両手に玩具のバルキリーを持ち、二機のバルキリーが追いかけてくつこをしている。それはだんだんと白熱し、ベッドを飛び起き動きが激しくなる。

「あつ」

突如、少年の動きが止まる。

「また、負けちゃった」

少年は興味が無くなったのか、玩具をベッドに投げ部屋を出る。色味のまるでない灰色が続く廊下を歩き、三つほど曲がった先の扉を開く。

広い部屋にはぎつしりとカプセルが並ぶ。2メートルほどの高さで、中には薄い色合いの養液が満たされている。

「まだ全然足りないや」

カプセルを撫でながら奥へ奥へと歩く少年。時折、「中身の詰まった」カプセルがあつたが少年に何の反応もない。奥には並べられたそれより二回りは大きいカプセルがあつた。少年はそのカプセルに寄り添う様に座り、目を閉じる。

「ねえ、おかあさん。不思議な人に会ったんだ。僕と同じじゃないのに、まるでおかあさんと話してる時の様な気分になるんだ。可笑しいよね」

そう言いながら笑う。カプセルに寄り添う少年には液体の流動音のみが耳に響く。何分ほどか、そうしていた少年は突然目を開くと飛び起きカプセルに笑いかける。

「じゃ、行ってくるね。おじさん達が新しい飛行機を作ってくれたんだ。楽しみ」

そう言って伸びをしながら少年はまたカプセルを撫でながら部屋を後にする。

何かを理解するという事

1

「つまり、資料にある様にここ近年の反政府組織の、、」

火星統合軍イシユマエル基地、その一室にはフラックとルカン、そしてウイルの三名と多数の軍人が席に着いている。キチリとした軍服が並ぶ中、これから街に買い物でも行く様なカジュアルな服装のフラック、油で汚れたツナギのウイル。さらには何処の民族の物かも分からない衣装に身を包むルカン。この場では明らかに三人は浮いた存在であった。

淡々と資料について話す初老の軍人は、時折あくびをするウイルに視線を送る。ウイルは視線にこそ気付いていたが、つまらなそうに資料を眺めていた。この部屋では遙かに階級が上であろうその軍人も、階級の外にウイルには関係の無い事なのだろう。その軍人は扱いなれない存在に気付かぬ振りで話を続けた。

会議が終わると皆足早に席を立ち、忙しそうな様子で部屋を出ていく。

「俺らも帰りますかね」

部屋にいた軍人が一人もいなくなった頃、フラックがそう言いながら席を立つ。

「ほら、ルカンさん。起きてっ。帰りますよ」

腕を組みまるで考え事をする恰好で眠っていたルカンをフラックが起こす。誰も注意をしなかったがルカンは会議中ずっと眠っていた。

「ああ、終わったのか」

「その大胆さには結構助けられてますけど。こういう時は止めてくださいね。会議中、ずっと言い訳を考えてたんですから」

机に突っ伏したままのウイルにフラックが声を掛けようとしたその時、宇賀神が部屋に不遠慮に入ってくる。

「まだ、ウイルは居るか」

入りながらそう叫ぶ彼はウイルの姿を見付けると満面の笑みでずかずかと歩み寄り、ウイルの持つていた資料を奪い取るところ言った。

「メシ、食いに行こう」

昼間を過ぎた食堂は人もまばらに落ち着いた雰囲気の流れる。それとは裏腹に一つのテーブルでは、せわしなく食器の音が鳴り続ける。テーブルいっぱいには並べられた皿はみるみる内に積み重なる。

「どうだ、ここの食事は。美味いだろう」

「ああ、美味い、、、けど」

パインスラダの最後の一口を食べフオークを抛ると三色のアイスを目の前に持ってきたウイルは言う。

「なんでこれは種類が少ないんだ」

「仕方ないだろう。そういつた注文をするヤツはここにはいないからな」

湯気の立つ熱いスープを皿を傾け流し込んだ宇賀神は、ふうつと一息つくど珈琲を持ち窓から見える景色を眺める。

「今日の話。お前はどっか思った」

宇賀神はウイルとは顔を合わさず景色を眺めながら尋ねる。

「正直、何やってんだと思った。統合軍も自分も。いつもあんな感じか」

「お前みたいな小僧でもそう思うか」

「うちの子供達に今日の事を話してみろ。そんなの何年も前からそうでしょ、そう言うに決まってるさ」

会議の内容はいたって単純だった。最近テロ組織の活動が活発です、先日も民間の施設が襲われました。だから掃除をしましょう。今回は民間からウイル君達も手を貸してください。以上。

ウイル達火星に住む民間人から見たら反政府組織の人間などそこらにいる。戦闘が行われたか、そうでないか。いわゆる実害が無いと言うだけで、隣人を最近見かけない

と思つたら組織の工作員で捕まっていた。そんな話が笑い話として通用する位なのだから。

会議の内容もそうであつた。テロやゲリラの殲滅や和解ではなく、沈静化が主な目的なのだと分かる内容であつた。それほどに闇は深く手の付けられない状況なのだ。今頃軍の上層部は今回の責任の押し付け合いの為に必死に動いているのだらうと、ウィルは感じていた。

「あんた位だよ、軍人らしい人って思えるのは」

「そうか。俺の所に来てくれる気になつたか」

宇賀神はようやくウィルと顔を合わせ、そう言いながら笑う。冗談だらうとウィルも笑う。

「、、それと、ルイは元気にしているか」

そう言うのと今度はウィルが窓の景色を眺めながら話す。

「親父はいつもの様にグラスを磨いてるよ。母さんがいなくなつてからずっと」

ウィルは物悲しくもどこか怒つた様に話す。アイスにも手を付けずに。

「食事の後に話すような事でも無いと思つたんだがな。それでも話しておきたかつたんだよ。おまえ、遊園地で歌つたんだらう、どうだった」

「いつも通りだ。観客は正体不明のテロリストだったけど」

「違う、そうじゃない。メリルと同じ様に歌って、どう思ったって事だよ」

一瞬、全身に力が入るウィル。しかし、直ぐにその力を抜き景色を眺めたままゆつくりと話す。

「正直分からない。子供達が危ないってなった時、あいつらをぶん殴ってでも止めた
いって思った。けど歌った。母さんがそうしたからなんかじゃなくて、それがその時自
分の出来る事だったから。そしてアイツが言ったんだよ。それはなんだって」

「そして、どうした」

「わからん。ただ正体不明のテロリストが俺の歌に興味を持った人間になった。それだ
けは感じた」

「そうか」

ウィルはようやく向き直りアイスに手を付ける。

「母さんもこんな気分だったりしたんだらうか」

「さあな、それは自分で答えを出すしかないだらう」

そう言つて宇賀神も珈琲を啜る。

「そうだ、この前新型のYF-23が来たんだ。羨ましいか」

「うちの会社に回してくれるってんなら羨ましくないな」

そう言つて二人で笑い合う。そのまま二人でYF-23についての熱い討論が続い

ていると銀色の髪をなびかせながらセシルが割つて入る。

「その新型の事ですが」

突然のセシルの登場に驚く二人。しかしセシルは淡々と続ける。

「あれはピーキー過ぎます。家鴨など早くも泣き言が漏れてます」

「俺から言える事は一つだ。慣れる。そうすれば旧式のバルキリーに遅れはとらん様になる」

かぶせる様にウイルも口を挟む。

「俺なら完璧に調整して見せる自信がある」

お前達が悪いんだといった口調の二人に溜息が出るセシル。

「戦闘機馬鹿が二人」

2

セシルとウイルは並んで夜の街を歩く。たまには家に帰れと半ば強引にウイルにセシルをまかせ、宇賀神は食堂を後にした。

「いつ以来かしらね。こんな風に並んで歩くのって」

「そんな懐かしむような前じゃなかったと思うが」

そう言つて舗装路を歩く。

二人の会話は続かず、どこか途切れ途切れだ。

「そういえば、あの曲。まだ完成して無かったのね」

「なんだ聴いてたのか」

「全部のチャンネル開けて流してたら嫌でも聴こえるものなのよ」

そう言つてくすくすと笑うセシルにウイルは何と無しにホツとする。陽介はまた昔の様に戻りたいと言つていたがセシルはセシルじゃないか、そう思えた。

その後も他愛のない話は続く。

帰路も半ば、その時二人を遮る様に子供が立っていた。

「やつと見付けた」

ウイルは声に反応して身構えた。身構えた後に声の主を理解した。遊園地を襲撃したバルキリー、ウイルを追いかけまわしたあのバルキリー。

ウイルに遅れそれを理解したセシルも身構えた。

「やだな。そんなに怖い顔をしないでよ。今日はただ挨拶に来ただけなのに」

ウイルは少年の言葉を聞きとつきにセシルを見る。セシルの表情は今までウイルが見た事の無い怒りを露わにしたものであり、ウイルには少年の存在や夜の暗がりよりも印象的なものだった。

「なんのつもりだ。何をするつもりだ」

先ほどとは別人である様な物言いにウイルの方がたじろぐ。少年はいたって普通に

話す。

「僕はお母さんに言われた事をするだけさ。ただ、お兄ちゃんの顔を見たくて寄り道しちゃっただけ」

明るく話す少年は、子供特有の無邪気さだけの雰囲気しか感じられない。とてもバルキリーに乗りテロ行為を行っているとは信じがたい雰囲気である。

「用も済んだし帰るよ。じゃあねお兄ちゃん。次はアレも聴かせてね」

「、待てっ」

少年に掴みかかろうとしたセシルをひらりと躲しセシルを後ろに蹴飛ばしながら、少年は暗がりの路地へウイルを横切りながら駆けていく。ウイルは何もせず何も言わず、それを見送る。

「なんで捕まえないの」

転んだままのセシルは言う。ウイルはセシルに手を貸しながら少年の消えた路地を見つめそつと呟いた。

「アイツ、遊んで欲しいのか」

誰に言っただけでも無いその言葉にセシルは何を思ったのか、何も言わず手を借り立ち上がる。

「帰るか」

ウイルはそう言いながら先を歩く。セシルもそれに着いていくが、それから二人が交わした言葉は別れの言葉だけだった。

ウイルはセシルのあの表情を思い出す。セシルは変わった。いや、変わっていつているのかもしれない。昔の様にと陽介は言ったが、それは無理だ。セシルも陽介も昔のままじゃない、勿論自分も。

なんだ、今日は随分難しい事を考えているじゃないかと、昔とは違う事を実感しながらウイルは帰路を歩く。

デブリ

1

「しかし、まあ。なんというか、腐っても統合軍様って感じだよな」

ノーザンプトン級戦艦が三隻、そのどれもに目立った改修がなされており、一目には元が同じ物には見えない。HGウエルズシティから南に80キロほど離れた荒野にその三隻と多数の軍人が作業している。ウィル達三人はそれをただ眺めていた。

「しかし同じ組織の人間だとは思えんな、各艦ごとに別々に作業をしている様に見えるぞ」

「俺らが乗る艦は火星の持ち物だが、残りは月か地球から来たみたいだからな。同じ組織、同じ作戦でも指揮系統が違うんだろう」

「マイクローンとは面倒なものだな」

「それでもないさ」

フラックの視線の先には愉快そうに談笑する軍人の集まりがあった。

「部隊章が違う。手前のは月のヤツだな、いくら上が違ってもこういう事がある。同期か何かの作戦で一緒だったか。ウマが合えば見た限りって訳じゃないさ。ルカンと俺

「が今こんな風に話してるのが根拠でいいか」

「なるほど。一期一会という事か」

「ちよつと違う。そうだよな、ウイル」

「飴を転がし戦艦の一隻を眺めるウイル。」

「なあ、今度アレ調達できるか上聞いてくれよ」

「ウイルの指さす先に大型の砲身がある。」

「そんなもん調達して何に付けるんだ」

「社長のティーゲルに。この前の遊園地の借りがある」

「火力馬鹿の社長なら喜びそうだな。会社の金で買うって事じゃなければ」

「どうにかならんか」

「誕生日プレゼントにしたって桁が五つほど違うんだぞ。酒でも買っていく方が現実的だな」

これから反政府組織の拠点を襲撃しに行く者の会話としては緊張感の足りない内容であるが、これが彼らの日常であった。何も考えず楽観的ではなく、むしろ考えているからこそなのだ。職業軍人でも傭兵事業でも根っここの所ではバルキリー乗りで、死生観も似たり寄ったり。向こうの軍人達の会話も日常と変わらないのだろう。

昼前から始められた作業も日が昇り切った頃には終えられ、最終的な作戦の説明が各

艦で行われた。説明が終わるとウィルは外で空を見る。そこにはフアボスと僅かに光るダイモスがあった。

「何か見えるのか」

右手で光を透かしながら空を眺めるウィルにフラックは伸びをしながら尋ねる。

「ダイモスの光が強い。こんな日はあまり好きじゃない」

どれどれといった様に見えるフラックだったが僅かに光るダイモスを見付けられずにいる。

「おまじないか何かか」

未だに見付けられない様子だ。

「いや、別に。好きじゃないってだけだ」

「そういうものがある時、どうするか知ってるか」

「知らん」

見つけられない事を誤魔化す為か、それともウィルの気分を晴らす為か。フラックは満面の笑みで空からウィルに視線を移す。

「そんなもん知った事かって思うんだよ」

思わず嘖き出したウィルは「何の解決にもならんな」と大声で笑う。

「いいんだよ。ちゃんと解決する様な事なんて数えるほどしか知らないね。誤魔化した

り見ない振りしながらやっていくしかないんだよ」

「何、恰好付けてんだ。似合わないぞ」

二人して笑っているトルカンが呆れながら呼ぶ。出発の時間が来た。

2

これから三日ほどかけシャーマ星系へ飛ぶ。探索を兼ねての航宙になりウイル達の仕事はその補助である。名目上、民間と政府軍の技術向上の為と謳っているが事実は厄介事の押し付けであり危険な先陣を任せられる。

確かに輸送船の護衛などで慣れた仕事ではあるのだが基本的に「襲われる」仕事であり、今回の様な「襲う」仕事ではない。しかし、フラックと社長はそれを快諾しウイル達三人どこに敵が潜むかわからないデブリ群を探索する。

「何でそう、ポップな曲を選ぶのかね」

ウイルの機体から軽快なテンポの曲が宇宙に流れる。暗い空間に不釣り合いな明るい曲調は嫌に空虚に感じる。

「敵機に見付かったらどうすんだ」

「むしろ見付かった方がいい。撤退してくれるなら、なおいい」

どこか上の空に言い放ったウイルにフラックは溜息が出そうになるが、よくよく考えるところなのかもしれないと探索を続ける。久しぶりに体感する「襲う」側の緊張感に

いつも通りではなかったのかもしれない。思考を普段と同じ様に、そう自分の気持ちを決めつけている時、フラックの機体は突然発砲する。

弾に貫かれた何かの残骸は、それが壊れるには十分すぎるほどの光と衝撃を放つ。

「宇宙は相変わらず物騒だな、オイ」

感知式の爆弾が残骸や岩屑に混じって流されていた。

物資の確保。それが常に重い足枷になるテロ組織においてデブリの採取は僅かながらも貴重な物である。そして、わざと自分達の痕跡を残す事もある。調査に来た船を襲う、またはこの様に新しいデブリを安全に確保する為に。

弾けた残骸のいくらかを採取してフラックが艦に通信を送る。

「今の見ました。いくらかサンプル採取したんで戻ってもよろしいでしょうか」

反応は実に冷やかだった。

「まだ探索と安全の確保が出来ていない。続けろ」

そのまま「ヤー」と吐き捨てた後、探索を続けた。フラックの採取した残骸は適当に見繕った物であった。あんな物が漂う空間に敵が潜む訳も無く、トラップがどれだけあるかも分からない。十分な専用の装備と然るべき人員で除去するべき物である。

「手柄は欲しいが、リスクはいらんないってか。随分人間らしい意見だことで」

「あっちあっち、向こうで発信が見えるわ」

ガビーがやかましく騒ぐ。ウイルがその方向へ進もうとするとフラックが釘を差す。「いいかウイル。遠くからぶつ壊せ。何があるか分からんし、ご丁寧にやってやる事でもない」

ガビーの指示通りの残骸を打ち抜くと先ほどとは違い、まともな壊れ方をした。

「発信機の類だろう。大方、獲物が掛かったら反応するんだろうな。何が嫌だって、やり方が説明できる位にこれがシステム化されてるって事だよな」

ルカンの発砲した先でも大きな爆発が起こる。ウイル達は出来るだけ最少範囲で、出来るだけ短時間で作業が終わる様に努める。

「毎度の事だが、生きた心地がしないな」

艦で珈琲を飲みながらソファーにドカッと座るフラック。ルカンは床に胡坐を組んで座っている。ウイルは着艦早々機体を弄り回していた。

統合軍の機体が続々と飛び出している。最終的な探索と探査機の設置に行ったのだろう。安全を確保するのは難しい事では無い、難しいのは安全を確保し続ける事である。さらに、その安全は地道に広げるしかなく、怠ればすぐにでも安全とは言い難くなる。イタチごっここと言うにはもう言い過ぎたほど言われ尽くし、フラックもルカンもそれを口にししない。やらない選択肢は無い。これが当たり前前の事になっている。

「どの位もつと思っ」

「二年か、早ければ半年だな」

「また物価が上がるのかよ。ボルカンの酒好きなんだけどな」

「だからこそ狙われるのだろう」

胡坐を組み瞳を閉じていてもルカンはフラックの冗談に真面目に返す。フラックは窓から見える統合軍の機体を見つめバツが悪そうに尋ねた。

「ルカンは今日初めてウイルと作戦に出たわけだが、どう思った」

姿勢も表情も崩さずにルカンは即答する。

「腕の立つパイロットだ。それは普段から知っている。……だが、戦士ではない。もし互いに命を預ける場面に会った時。俺はウイルを信用しないだろう」

「それはつまり」

「ウイルを守る立場になるという事だ。それが戦士というものだ」

呆れる様にルカンを見たフラックだったがまた視線を戻し、きっぱり言い放った。

「俺はあれがいいと思ってる。むしろ俺等みたいになつて欲しくないと思うね」

ピクリと眉を動かしたルカン。

「それは理想だ。戦いの場では通用しない。互いによく分かっているだろう」

珈琲を飲み干したフラックは作業する機体の先、デブリ漂う空間の先、そのずっとずっと先を見て、ふうと一息付いた後カップに新しい珈琲を注ぎルカンの側に置く。

「ウイルを手伝ってくる。どうせ長旅なんだ、ゆつくりしようや」

コツコツと靴を鳴らして歩くフラックに「後で行く」と簡素にルカンが言うと、それを見ずに手を振って廊下を歩いて行った。

男の遊び

1

シヤーマ星系第3惑星、ボルカン。2040年に自治政府になり、地球を思わせる緑と人々が活気つく豊かな惑星である。

今回の仕事は地球から、ここボルカンまでの探索と安全なルート確保の為である。勿論安全なルートは今までもあったが数が多いにこした事はなく、磁気嵐やデブリの漂流などで迂回した輸送船が狙われたといった報告も多々ある。それでなくとも襲われる事を危惧しウイル達のような生業の者に警護を頼むのも珍しくない。結果、輸送費がかさみ単価が上がる。どちらの惑星にも旨みが無くなってしまふ。純粋な経済発展としての活動とテロ組織の活動抑制、利害は一致しているがウイル達の会社にとっては客が減り少しの不利益でもある。しかし、雇った傭兵団が実はテロ組織だったという話もある中、声高々に主張できない一面もあった。

「さて、後は帰るだけだ。出張先の楽しみは格別だよな。火星で何かやろうもんなら、すぐに噂になっちまう」

「んん、まだどこか行くのか」

夕食を済ませホテルまでの道中でフラックは実に楽しそうだった。

「決まってるだろう。これも戦士の休息ってヤツだよ。子供は早くホテルに帰りな」

「すまん。ウイルには刺激が強い」

ウイルはもう二十歳を超えているが、彼等からすればまだ入社した頃の十六歳のウイルなのだろう。

「ああ、わかつたよ。楽しんでこい」

道中、別れはしたがウイルも直接ホテルに帰る事はしなかった。ふらふらと歩き、何度か路地裏を曲がり巡って淡い光を放つバーを見付ける。中からはピアノの音が流れる。

扉を開けると心地よい音色と甘い酒と煙草の匂いがする。まるで自宅に帰った様な気さえ起る空間でウイルはカウンターに座る。

「何か飲むかい」

ウイルと同世代だろうか、どこか育ちの良さそうな店員はピアノを演奏する女性を眺めたままのウイルに尋ねた。

「ジントニック」

店員はかしこまりましたと言わんばかりに軽く頭を下げ、ウイルは女性を眺めたままである。

落ち着いた曲調のピアノと確かに力強い歌声はこの雰囲気にとっても合つて溶け込んでいた。

「彼女のファンなのか」

ジントニツクを差し出した店員はそう馴れ馴れしく尋ねる。

「いいや。けどいい歌だ」

ウイルの視線に気付いたのだろうか、彼女が一瞬ウイルを見た。ウイルは何の素振りも出さずに見つめ続ける。彼女が少し微笑むと演奏が終わる。拍手に包まれながら彼女はウイルの方へ歩み寄る。

「なあ、あれ使つてもいいのか」

ピアノを指さし店員に尋ねると少し困つた様な表情であったが、お好きにどうぞといった素振りを見せた。ウイルがジントニツクを一口で飲み干し席を立つと女性とすれ違う。ウイルはすれ違つた時に呟く。

「何をそんなに迷つてんだ」

そう言つてピアノに向かった。

ピアノに座つたウイルに少し、ほんの少しだけ店内がざわつく。客の誰もこの上質の雰囲気を壊されたくない。しかし、薄汚れたツナギ姿の青年がピアノの前に座りそれを壊す、客の誰もがそう思った。

ポロンツ

恰好に似つかわしくない丁寧で儂げな音が響く。ウイルの歌声もどこか悲しいものだ。淡々と流れる曲に客の誰もがいつの間にか目を伏せ会話は止まり、中にはじつと手に持つグラスを見つめる者もいる。ウイルが座っていた席の隣で先ほどの女性はウイルを見つめた。ウイルと同じ様に。

ウイルは深く空気を吸う。

ダアンツ

とたんに、曲調に光が入った。ウイルの声にも力強さが宿り、次第に曲にテンポと活気が出てくる。ウイル自身も鍵盤を見つめていた視線が天井の照明に移り笑顔で客一人一人を見る。老夫婦に仲の良さそうな若い青年の集団、数組のカップルのその顔を。春を思わせる様な曲にいつしか客達の顔もほころび、同時にウイルの心も踊る。

弾き終わると拍手が飛んだ。お礼のつもりなのだろうか、ピアノをすうと一撫でしたウイルは立ち上がり深々と頭を下げ、元の自分が座っていた席に戻る。

「すごいな。正直、何しでかすかと冷や冷やしたよ」

店員は彩の良い真つ赤なカクテルを差出し爽やかに笑う。

「お礼って事じゃないが、出演料、俺のおごりだ」

しかし、そんな店員に視線も送らずに、椅子に座ったウイルは女性を見る。目にずつ

と、収めている。

「すごいわね。いつもこんな事を」

「いや、たまたまだ」

「歌手なの」

「そんな風に見えるか」

どう取り繕っても、きらびやかな職業の者には見えないウィルの恰好を再確認した様に女性は笑う。

「可笑しな子ね。なんであんな事、私に言ったの」

「そう見えて、そう感じて、そう聴いたから」

「ほんとに可笑しな子。でもね、半分当たりよ」

「半分、」

「君はまだ若いもの。迷う事が悪い事だと思ってるのよ」

少し考えたウィルはおもむろに女性の心臓の上に手を当てる。ドレスの上からではあるが、女性の胸の上である。店員が少し慌てる。しかし、それに狼狽えず拒否するわけでもなく女性はそれをただただ受け止める。

「貴方のここは迷う事無く動いている。なのに貴方は何に迷う事があるんだ。、、昔そう言われたんだ」

女性はしつかりとウイルを見定め、同じ様にウイルの胸に手を置く。ゆっくりと、そして視線も逸らさず。

「貴方の鼓動は迷った事なんて無かったのかしら」

そう言われウイルは自分の鼓動が少し早くなるのを感じた。何がそうさせたのかも分からず、ただそれを感じ取る。

何の反応も見せないウイルに女性は胸に手を置いたまま、唇をウイルの耳元に近付けた。女性の髪からは甘い香水の香りが漂う。

「どこかに泊まつてるのでしょうか。貴方の話、もつと聞きたいわ」

ウイルはそのまま立ち上がり開いていた手をぐつと握りしめる。そして笑顔を女性に向けた後、出演料であったカクテルを一気に飲み干す。

「すまん、先約ができた。話はまた今度でもいいか」

そう言つて空いたグラスを店員に差し出す様に置く。

「美味かった。ありがとう」

扉ごと飛び出す勢いで店を出たウイルの背中を女性と店員は眺める。

「、ほんと若いわね」

「何か飲まれますか」

取り繕う様に店員が尋ねる。

「さつきの子と同じ物を」

ホテルに戻ったウイルは譜面にどんどん書き入れていた。何枚も何枚も。

「なんだウイル。こんな所に来てもそれなのかよ。もつと子供は遊べよな」

明らかに泥酔しきつた様子のフラックをルカンが担いで帰ってきた。

「お前は遊び過ぎだ」

ルカンはフラックをベッドに投げ飛ばすと冷蔵庫を漁る。

「いいじゃねえか。ウイル。俺がお前位の頃はよく女遊びしてたもんだ。なのにお前ときたら仕事仕事仕事に譜面とにらめっこだっ」

「よく女遊びしてたヤツが今日の様な醜態か。勘弁してくれ」

水を手を取ったルカンがそれをフラックに投げつける。どうやらフラックの言う女遊びは散々な結果だったようだ。フラックが騒ぎ続けても、ウイルは憑り付かれた様に譜面に書き続けている。

「何かいい事でもあったのか」

散々喚き散らしたフラックが寝てしまった頃、ルカンがウイルに尋ねた。

「そうだな、いい事だ。たぶん、いい事だと思う」

煮え切らない返事であったが、嬉々として譜面に音符を書いているウイルの表情に「そうか」とルカンも微笑んだ。そんなウイルを眺めていたルカンにウイルが出し抜け

に聞く。

「何かが変わるって事はいい事だよな」

水を一口含んだルカンは静かに、本当に静かに話す。

「俺はゼントラーディだ、それも純血の。そしてマイクローンになった、文化によって変わった者だ。変わった者として言わせてもらえば良い事も悪い事もたくさん増えた。それだけだ」

その言葉にどれ程の思い出や経験が詰まっているのだろう。そしてウィルはどれほどそれを理解できるのだろう。

「俺はルカンが居てくれて嬉しい事や楽しい事の方が多いで」

譜面を書きながら言ったウィルの言葉もどれ程ルカンは理解できたのか。

「ありがとう」

ルカンが確かな口調で言うのとそれから二人は何も話さずにいた。ただ譜面を書くペンの音だけが部屋で奏で続く。

乱気流

1

ウィルがボルガンへ向かう三日前。

火星統合軍基地内で、静かな重い空気に満たされた部屋があった。

「私達に出撃命令はいつ出るのでしょうか」

普段とは見違えるほど真剣な表情で書類を眺める宇賀神に対し、セシルは感情も込めず静かに尋ねる。セシルの後ろには家鴨とオーツの姿もあった。

「大尉は、この様な作戦にさく人員は少ないと仰いました」

「だから統合軍総出での作戦だ。人員は足りている」

書類から目を離さずに答えた宇賀神にセシルも食って掛かる。

「足りてる。なら何故民間からも、それも、」

言葉の途中で言い迷ったセシルに宇賀神の言葉が割り込む。

「ああ、小僧のトコに協力を仰いだ。それに可笑しな事でもあるのか。あそこは金で飛ぶ連中が集まっている。上官からの命令や自分本位な思想で飛ぶヤツよりも、幾分信頼できる」

「身内よりも、随分と評価されるのですね」

吐き捨てる様に言ったセシルに宇賀神は初めて書類からセシルに視線を向ける。いつもの朗らかな表情ではなく、書類を眺めていた真剣な表情で。

「そんなに人殺しがしたいのか」

今までの会話から飛び出した問いにセシルは反射的に答えてしまう。

「そんな事、したいわけではないでしょう」

語威が強くなる。

「ああ、そうだろうな。俺だつてそうだ。だが、お前はそうならない様に出来るか。的確に敵機のコックピット以外を打ち抜き無力化させる。テロリスト共が二度とテロリストとして生活しなくてもいい舞台を整える。犠牲者だけが犠牲者では無いんだよ」

重く、緩やかで、ハッキリとした口調。

家鴨は委縮し、オーツは目を閉じ手に力が入っている。

「そうでなければ人を簡単に殺してしまうぞ。そんなつもりじゃなかったでは済まされない。死んだ人間の家族や友人は済ませてくれない。そして、お前は自分で自分を許せなくなる。、、そういう事がしたいのなら、自警団や傭兵にでもなるんだな」

セシルからは言葉が出ない。

「お前は何をしに軍に入った」

「、、人を、守る為です」

「知っている。銃弾から守った人間の飯は、寝る所は。銃弾を撃った人間はお前の守るべき人では無いのか。答えが出て俺が納得したら出撃させてやる」

宇賀神が書類に視線を戻すと、一呼吸置いて「失礼します」と敬礼の後セシルは退出する。家鴨とオーツも続いて退出しセシルを追いかける。

「何も、あんな言い方はないと思います」

家鴨はセシルの背中に言うが、セシルは振り向かずただただ歩く。

「自分は、大尉の言わんとする事は分かる。むしろ正しいとも思う。ナズはそう言うがあそこまで言ってくれる人も珍しい」

オーツもセシルの背中を見つめる。

「そうだな。あの人は、そういう人なんだ」

セシルは振り向かずただただ歩く。格納庫へ。

オーツと家鴨が顔を見合わせ何か確認をする様に微笑むとセシルに付いて行く。

「行くぞ」

セシル達は今日も飛ぶ。

2

ボルガンを発った三日目。ウィル一行は実に緩やかな航宇で地球圏に進路を進めて

いた。出発当初、統合軍の中で浮いていたウイル達だったがパイロット同士の親近感か、今では待機中に冗談を話せるまで溶け込んでいた。中には未だウイル達「金で飛ぶ者」に嫌悪感を抱く者もいたがフラックの人懐っこさやルカンの任務への姿勢、ウイルの整備やピアノの腕にある種の信頼の様な物が芽生えていた。

「おおい。もうすぐ交代だ」

フラックが発進準備を終え、哨戒中の隊員に信号を送る。

「もうそんな時間か、おいウイル。終わったら時間が空くだろう。また格納庫で飲もうぜ」

「いいぞ、酔って工具をぶち撒かないって約束出来るならな」

哨戒中の隊員達は笑いながら艦に戻ってくる。

ウイル達の機体に火が入る。

「はーい、こちらメリメロ。発進準備終わったぞ」

フラックの呼びかけにオペレーターから許可が下りる。エンジンの音が綺麗にまとも三機は宙に舞う。

「じゃ、待ってるぜ」

艦に帰る隊員達は手を振りながらウイル達の脇を通り抜けた。

「さあ、仕事仕事」

フラックが気楽そうに言う。三機は散開しながら母艦を先行し、航路を進む。

行きは新規航路の開拓であったが、帰りは戦艦を主体に三部隊に分かれての既存航路の整備が目的であった。

「しかし、流星に何も無いなオイ。やる意味あるのかよ」

「何も無いという確信の為にやっているんだ。意味はある」

ぼやくフラックに淡々とルカンが返答する。ウイルは相変わらず鍵盤を叩く。

「ウイルよお。一応普通の操縦桿も付けてんだろ。使ったところ見た事ないぞ」

「一応フラック達の機体を弄る時は触ってるぞ」

「そうじゃなくてよ」

「あーもう。いちいちウルサイ男ね。細かい男はモテないわよ。ウイルはウイルのやり方があるの、いちいち口出ししないの」

淡々とした作業に飽いて口数の多くなるフラックにガビীর悪態強くなる。案外気が合うんじゃないのかとウイルに笑みが出る。

「ウイル下がれ」

会話の途中でいきなりフラックが叫ぶ。

ウイルの目前に閃光が弾ける。

「ちっ、網が張ってある。メモリからコントロール。敵機が来る、出せるだけ、」

言い終わる前にフラックが回避する、機体がいた場所に無数のミサイルが通過するとたちまち閃光が走った。

「くつつ、ルカンツ」

ルカンの機体がミサイルを吐く。向かう先は大振りの岩石。

「本艦前後方にフォールド反応」

オペレーターから通信が入ると同時にルカンの狙った岩石にミサイルが着弾、溢れる爆煙からミサイルが弾き出され戦艦に飛ぶ。

「ピンポイントバリア急げ」

「オーベルト級敵戦艦来ました」

やかましく通信が鳴る中、フォールドした前方敵戦艦から十数機の敵機がウイル達に向かう。

「やつと会えたね、お兄ちゃん」

一機突出する敵機はウイルに向かい真つ直ぐ飛ぶ。戦艦に着弾するミサイルの閃光と同時にウイルは敵機に反応し回避を取る。ばら撒かれる銃弾を縫うように敵機に迫り交差する。

「ちよつと、ウイル。またアイツよ」

交差する一瞬コックピットから互いに視線が合った。

あいつだ。

遊園地で聞いた声、路地裏で会った瞳。無邪気な声で澄んだ瞳。

「おいおい、まずいぞ」

トラップのミサイルと前方の敵機に気を取られた隙に後方の敵戦艦からのミサイルが戦艦右側面に着弾した。

「出力下がってます」

「ガゼル、ラビッツ発進できません」

「後方より熱源反応、数十二」

戦艦左後方から機体が出る。敵味方、数はほぼ同数。

「後方を止める。艦は前にばら撒け。羽虫はこっちで止める」

フラックがこれでもかと大きな声で通信を送る。

「何を勝手な、」

司令部の指示の無いまま発進した機体はフラックの指示に従い後方の機体に向かう。

「責任はお前が取れよ」

後方に向かう隊員は口々にフラックに投げかける。

「前全部俺らが引き受けるんだ。十分な責任だろうが」

フラックの指示で戦線が膠着し、司令部より各隊への指示がようやく飛び交う。

ルカンとフラックは乱れ飛ぶ銃弾を避けつつ応戦する。ウイルはアイツに追われながらも一機つつ丁寧に敵機を無力化させていた。

敵機がステイツキー弾や乱電流弾で無力化される中でも変わらずアイツはウイルを追いついてる。

「ねえ、知ってるかな」

「何がだ」

ウイルにアイツから呼びかける。会話中でも両機の様子は変わらない。

「もうすぐね、こんな風に火星にも行くんだ。お兄ちゃん程じゃないけどあのお姉ちゃんにも会えるかな」

「どういう事だよ」

思わずフラックが溢すと同時にウイルの背中に熱い電流が滲み広がる。

ウイルの機体の速度が上がる。無理な挙動から追われる側から追う側に移行し、追われた時以上に両機の距離が詰まっている。

「何やってんだっ、お前はっつ」

ルカンも、フラックも、誰も聞いた事の無い怒号の様な声で迫るウイルがアイツを追いついてる。

「ははっ、すごいすごいっ」

目まぐるしく動く両機に敵味方問わず把握出来ていない。出来ない。援護も加勢も無しに二機だけの空間が出来る。

しかし、一発の銃弾もミサイルも両機から放たれない。ただただ追いかけて追われ、ウイルのピアノの音と駆動音のみが響く。

「お兄ちゃん、時間だ。船を止められなかったのは残念だけどお兄ちゃんがいたからね。楽しかったよ」

アイツはウイルの様に無理な挙動から一変、自分の艦へ飛ぶ。半数に減った敵機もフォールド範囲内に集まっていた。

「引くか」

ルカンが溢す。戦線が維持され敵艦から淡いフォールド空間の光が発せられ、ルカンもフラックもこれからの事に意識が移った時。

「待ちやがれっ」

ウイルの機体がバトロイドに変形しながら、追いつけたアイツの機体に激突し組み付いた。二機が慣性と運動で激しく飛び回る。

「おいつ、ウイルっ」

フラックが発したと同時に、組み合った二機が揉み合いながら敵艦と共にフォールドした。

静けさと、ぼっかりと抜けた空間。敵艦もウイルの姿も無い。
「どうすんだ、コレ」

フラックが抜けた体の力と共にぼそりと呟く。

1日

1

光もぼやける白色の通路に固い靴音が響く。開け放たれた扉からは明るい笑い声や話し声が聞こえ、騒がしいくない賑やかさで溢れている。通路の奥、閉じた扉を開くと部屋から光が伸びる。部屋には日が差し、ベッドには女性が一人窓を眺めていた。扉に立つセシルに目を向けると「何か御用でしょうか」と。

「お嬢さんに頼まれました」

セシルは荷物を机に置くと花瓶の花に手を掛ける。女性はそれをただ受け入れ、また窓を眺めた。

「あの子は全く。大人にも迷惑かけて」

「私は迷惑だと思っと思っていますよ。それよりお加減はいかがですか、お嬢さんに伝えておきますよ」

花瓶の花を取り換え終えたセシルはそう言いながら椅子に腰かけ女性を正面に据える。

「そうね、身体に何かあるわけでは無いのだけれど。どうしてかしらね、手に力は入らな

いし、立つのもやっとなのよ」

話す女性には焦りや戸惑いがあるわけではなく、自分への諦めの様な喪失感が浮かんでいる。セシルは柔らかに話を聞いている。

「それより、貴方軍人でしょう。セシルとは」

「ただの気の合う友人ですよ」

「そう。あの子は。あの子はね、あの人がいなくなってから変わってしまったね。それはこんな私の所為でもあるのでしようけど。一人で生きていこうとしているのよ。ウィル君達と仲良くなってからそれも変わったと思ったのだけれど。初対面なのにこんな事を頼むのも変かもしれないけれど、セシルと仲良くしてくださいね」

そう言う女性に少し困った表情で微笑むセシルは黙って頷く。

「貴方もメルトランでしょう、分かるのよ。だからセシルも貴方と仲良くできたのかもしれないわね」

「お嬢さんは誰とも仲良く出来ていますよ」

「そうね、あの子はマイクロンの子でもあるから。それでもね、変えられないモノもあるのよ。ここはそうでもないけれどね。マイクロンはマイクロン。私達はマイクロンには成れないのよ」

女性はまた力なく窓を眺め、セシルは何か言いたげに口を開くが声を出さずに表情を

整える。

「また、来ますよ。今度はお嬢さんの頼みではなく」

女性に反応はない。セシルは固い靴音を響かせながら部屋を後にし、すれ違う看護師に軽い挨拶をしながら歩き続けた。

若い看護師が恰幅の良い看護師に尋ねる。

「あの方ほとんど毎日お見舞いに来てますけど、恋人でも入院されてるんですか」

「新人はそんな事気にするんじゃないの。目の前の患者さんに集中しなっ」

慌しく駆けていく若者と颯爽と出ていく若者、恰幅の良い看護師はどちらにも溜息をつく。

2

夜、多種多様な民族がやかましい火星も夜は静かだ。

「やあ、今日は来ないかと思つたよ」

扉を開けたセシルに陽介はにこやかに笑う。セシルはキョトンと顔をしかめるが、そのまま陽介の隣の座ると準備されたグラスを撫でる。

「どうして来ないと思つたんだ」

「ウイルが任務中に消えたそうだよ」

グラスを回しながら冗談を言う様に話す。座りなど言う様にテーブルにグラスを置

く陽介はボトルを握る。

「ウィルは…関係ない」

陽介はセシルのグラスにボトルを傾けながら「関係あるさ」と声を搾る。酒がグラスになみなみと注がれていく。

「関係ない…」

「関係あるね。昔のセシルなら今頃、ウィルを探しに飛び出してたさ。見付からないと分かっていてもね」

セシルが感情任せにグラスを取った時、グラスは揺れ酒が手を濡らす。それがセシルの動きを止めた時、陽介はセシルを見ず真っ直ぐを見つめ話す。

「今の君はまさにそんな感じだよ。なんでもかんでもしよい込んで、下手に動くと溢してしまう。悪い事じゃない。けどね、昔のセシルなら溢すのも関係なくそれを飲めていたさ。笑いながらね」

「私がウィルを探しに行かない事に怒っているのか」

セシルの言葉に陽介から深いため息がでる。その態度に答える様に、セシルはグラスを一気に飲み干す。

「そんな事したらね、僕は本当に怒ってたよ」

ーッッ

声にならないまま机が叩かれる。激しい沈黙が続くと上から声がする。

「どうしたの」

女の子が降りてくる。

「ごめんね。起こしちゃったね」

「わあ、セシルおねいちゃん」

女の子はぎゅうと優しく抱き着く。ふわりと抱き返すセシルに先の険しさは無く、ただただ優しさに満ちる。

「なんでおきてる時に来てくれないの」

「ごめんね。次はちゃんと来るから、今日はもう寝なさい」

「ホント? やくそくだよ?」

頭を撫で、背中をポンと叩くと女の子を抱きかかえた。

おでこにキスをする、階段から見えなくなるまで女の子を見つめていた。

「約束は僕も覚えておくよ」

「お前は覚えていなくていい」

「そうはいかないよ。破ったらウィルとお仕置に行くさ。あの頃みたいだね」

陽介はにししと笑う。

「変わらないなお前らは。私は帰るぞ」

静かにドアを閉めたセシルに、まだ笑いながら「変わっちゃったさ、」そう言いながらまたグラスを傾けた。